

# 「小説」—そのあとに

宮城県宮城第一高等学校 都築みと

はじめに

「いろんな解釈があって、答えがはっきりしないから、国語は苦手、嫌い。」国語嫌いの生徒の決まり文句ではないだろうか。それは主に、「小説」を指していることと思う。しかし、解釈が絶対にぶれてはいけないところと、様々な解釈をして良いところをはっきり示し、前者においては技術的に読解方法を身につけるべくトレーニングし、後者においては、文学作品として存分に味わう経験ができるなら、生徒にとつてこんなに腑に落ち、かつ手ごたえのある学問分野はないのではないか、と思う。本稿では筆者の二〇一七年度までの勤務校である宮城県仙台二華高等学校の第一学年を対象に行った授業（国語総合）の概要を紹介し、その課題と成果について考察したいと思う。

## 一 最初の小説『羅生門』

『羅生門』の授業で押さえておくべきポイントについては、今まで、多くの方が述べてきたことであるので、ここでは触れない。それらのことを踏まえつつも、授業では①登場人物のプロファイリングと②場面設定と③登場アイテムを意識させることにしている。

### ① 登場人物のプロファイリング

最近では犯罪捜査の手法として用いられる用語であるが、そもそもは「人物像を描き出すこと」を言う。人物像の把握が成功するか否かは、犯罪捜査のごとく、本文に残された遺留品ともいえるべき記述を拾うこと

ができるかどうかにかかってくる。森鷗外『舞姫』のような中編は、主な登場人物の年齢や職業などが詳らかに記されているが、『羅生門』のような短編ではそうならないことが多い。

### ② 場面設定

天候（雨）が心情（サンチマンタリズム）に影響を与えるように、時間・場所・気候・色彩などは、登場人物の心情を描き出すために、作者自身が決定していることに気づかせる。生徒は、「実際そうだったから、そう書いてあるんですよね？」と思っているフシがある。小説を、読んでいるうちに無意識に実話と思いこんでしまうことがないように、すべて作者の意図で構成されていることを、重ねて確認する必要がある。

### ③ 登場アイテム

『羅生門』には蟋蟀・鴉・にきびなどの「アイテム」が登場する。わかりやすい素材は、川上弘美『水かまきり』で、作品中によるかんやおぐらアイスなどが登場するが、なぜシュークリームやザッハトルテではないけなかったのか考えさせてみると、小説にちりばめられた数々のアイテムを配置したのは作者で、必ずそこには意味があるということに気づく。また、人物のプロファイリングと重複する部分もあるが、名前や髪型なども作者が意図的に設定している。それらは小説のカラーを決定することもあるし、登場人物の心情を反映していることもある。

①と②・③を合わせて考えることによって、どんな人物が、どんな気持ちで、なぜそうなったのか、その流れが見えてくる。逆に、どんな人



この課題には生徒の食いつきがよく、どんな俳優さんをキャストイングしようかとか、どんな音楽を使おうかとか、こちらの意図からはずいぶんそんな勢いであるが、実は「観客動員数を意識して」というのが歯止めとなる。映画のキャストというのは原作がある場合、万人が納得する、つまり、イメージにぴったりの配役となるか、逆に、まさかこの俳優が、というようなイメージを裏切る配役となるかどちらが多い。そしてこれは、どちらにしてもプロファイリングがきちんとできていないというまじかかない。ファイリングでやつてしまうと、級友に反応してもらえないという事態がおこる。それどころか、批判にさらされることになる。つまり、観客動員数は得られないということだ。また、映像化するということは、場面設定をしなければならぬ、登場アイテムも考えなければならぬということ、何をはつきりさせなければならぬのか、わかってくる。

さらに、②「あらずじ」と「キャッチコピー」も作成させる。すると、小説のポイントがはつきりするが故に、「○○○なのだった」などで止めることもできる。ただ分量の上でだけまんべんなくまとめたものは要約とは言わず、ポイントを中心にまとめたものが要約であると気づくことになる。また、文学作品においてこの映画ポスターのあらずじを作成するために、言葉は本文において心を打ったもの、感動をよびおこしたものでなくてはならず、新学習指導要領「情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること」<sup>(注1)</sup>の実践ともなる。

その最もシンプルで、かつ突きつめたものが「キャッチコピー」となる。実際に生徒はまず印象的なセンテンスをそのまま持つてくる。大概それはクラスの「流行語」になったりするたぐいのもので、誰しもが使ってみてみたいフレーズだ。もっと挑戦的な生徒は、小説の世界を独自の言葉で表現し、作者に迫ろうとする。また、①「作品解説」にチャレンジすると、「作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉えようと

もに、作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、作品の解釈を深めること」<sup>(注2)</sup>を自然に実践できる。映画のチラシには、監督がそれまでに製作した映画の情報が入っていたり、原作者の他の作品が列挙されていたりすることもある。「映画のチラシっぽく」を追求すると、調べることがおのずと増え、生徒が深い関心を持つきっかけとなる。また「作品の内容や形式について、書評を書いたり、自分の解釈や見解を基に議論したりする活動」<sup>(注3)</sup>にもつながっていく。

以前、夏季休業中の課題として、『夢十夜』『刺青』『天守物語』『桜の森の満開の下』『高野聖』から一つを選び映画化する、という取り組みを行ったときは、特に指定をしなかったので、『夢十夜』については、第十夜までのオムニバス形式のような企画があがってきた。今回の取り組みでは、教科書に掲載されている第一夜と第六夜以外を読み、一つ選んで映画のチラシを作成することを条件とし、読書の機会を確保した。また、既に生徒たちは、情報科の学習などでPCの使用にも習熟しているので、PCによる作成も可とし、PCや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会とした。

### 三 もう一度『羅生門』に戻る

三月の最終考査が終わったあとの取り組みは、学校によって様々だろう。ここでは三月に行った「新聞の読み比べ」および「新聞記事を書く」実践例を紹介したい。

二〇一八年三月といえば、一面記事は「佐川国税庁長官辞任」に関するものが多く、各紙、社説やコラムも同じ話題に触れていた。すべて同じ問題について書かれたものでありながら、なぜ、ニュース報道（一面記事）・社説・コラムと分けられ、書き方が変わってくるのかを五〜六人のグループごとに話し合わせた。この時点では教師側からの答えは提示せず、グループ代表の発表にとどめておいた。なんとなくつかめたところで、次のような課題を示す。



### ◆ニュース報道

○カット見出し・主見出し・袖見出しなどを効果的に整えるべきだった、またはそれができていた。(映画のキャッチコピーの経験)

○事実関係の報道に徹するべきだった。

### ◆社説

○ニュース報道を踏まえながら、どの部分についてどう考えるのかを入れないと、あらずじけだけのものになってしまふ。

○ニュース報道とコラムとの違いは明確にしづらい、社説というものをよくわかっていなかった。

### ◆コラム

○ものや言葉を知らないと書けない、センスが問われる。

○捉え方や事件の切り口をどこにするかに注意しないと普通すぎる内容になってしまう。

課題の後、以下のような解説を加えた。——実際の新聞では、ニュース報道においては、「森友問題」のうち、このとき明らかになった情報をメインの内容に据え(まさにニュース)、社説は情報をもとに自説を展開している。そしてコラムは、朝日新聞「天声人語」(二〇一八年三月七日)を例にあげるなら、「森友問題」のうち、「書き換え」に着目した上で、①「文学」で使用する消しゴム↓推敲、②公文書で使用する秘密の消しゴム↓公文書書き換え、③権力者たちに使用されてきた怪しげな消しゴム↓歴史の書き換え、を巧みに並べ、オチをつけながら、主張を明確にしている。本物の新聞が扱っている問題の難易にかかわらず読みにくいのは、第一に「情報の編集」が的確になされ、簡潔に表現されているからだ。コラムにおいてすら「ものや言葉」をたくさん知っている、センスがよくても、新聞記事という限られたスペースで表現するには冗長であってはならない。

### 平安日誌

「門」のつく熟語を、あなたは何個言えるだろうか。名門、閨門、お門違い…。無数にある。ひとつの空間的、時間的、精神的区切りとして、「門」は人々の生活に密着し続けてきた。ところを問わず、門のある場所は街の重要な拠点である。ところであなただけの街の「門」、ちゃんと機能していますか?▼洛中が混乱の度を深めている。朱雀大路の南端、羅生門の荒廃が以前から問題視されていたが、先づいにそこで引剥事件が起こった。被害者は瘦身の老年女性、犯人はまだ若い男性だという。未だ逃走中とのことだが、果たして犯人が逮捕される日は来るのか▼犯罪でもせぬと生きてはゆけないというのが現実だ。失業と飢餓が深刻化し、明日の生活のあてもない。この混沌の中間われるのは人間の本性である▼人は生来善か、悪か。治安の著しく悪化した洛中を見てみると、人間の本性は利己的欲望だという性悪説に頷きたくなる。しかし性善説の主張は利己的本性を持つからこそ後天的に善を習得すべきだというもの。願わくは、人々の善行習得まで含めた上で、性善説を信じたいものである。

▶生徒作品 コラム

▶「天声人語」  
(朝日新聞 二〇一八年三月七日 朝刊)

次に、それぞれの書き方を選択したか、生徒のタイプを考察する。ニュース報道を選択した生徒は、普段読む作品においても、構成・表現に興味を持つている生徒、コラムを選択した生徒は、知識が豊富で、文章を書くことに長けた生徒であった。この二つのタイプの生徒は小論文を書かせたときに面白がって取り組む生徒である。一方、「このあたりが無難」として社説を選択したであろう生徒は、小論文を書くのもやや苦手であるように感じた。しかし、社説を書くのに必要な、①事実を踏まえて、②考えを書く、③何を取り上げるか工夫する、のうち①・②ができていれば、それこそ無難な小論文は書けるはずである。③ができれば、少し抜kindでた出来になるはずである。また、最近は無関私立大学の入試の論述試験において、「論説型」だけではなく、文章として巧いものも評価されると聞く。持てる知識を常にアウトプットする機会はこれから重要になるだろう。

#### 四 授業を終えて

紹介したのは、高校一年生のあるクラスでの一年間の取り組みではあったが、「映画化」の取り組みは改善を加えながら十年ほど行っている。初めのうちは、こちらがこと細かに指示しなくても、「映画化してみよう」というだけで、意図をくみ取り、なおかつ自主的に工夫できる生徒が多かった。しかし、ここ十年で生徒も変容してきたため、具体的にあらすじとキャッチコピーを課し、裏表の両面を作成するように、指示内容を絞り込んだ。また、ここ二三年でPCでの作成を可とした。生徒もただ楽をするためにPCを使用するわけではなく、PCだからこそできることを取り入れながらより良い作品に仕上げるといったスキルを持つようになつた。ただ、そこまで生徒自身のPC活用技術力や情報収集および編集力が向上していながら、県立高校の多くにおいてはPC活用のための環境は整っていない。

次に、今回初めて作品に仕上げさせた新聞記事については、生徒の捉

え方が二通りに分かれてしまい、最初の指示が足りなかったと感じた。それは、扱う事件を『羅生門』としたものの、書く者の立場を平安時代におくのか、現代におくのかを明確にしなかったことだ。「事件」としたのでライブで書くものと思いきや、コラムの「素材」として(現代の視点で)『羅生門』を取り上げた生徒も出てきた。また、ニュース報道・社説についても立場の不明瞭さ故に、内容が揺らいでしまった生徒も見受けられた。

#### おわりに

国語総合は、国語のベースづくりと位置付けて良いと考えている。自由に楽しむことと、自信を持って読解できることを同時に体験させられれば良いと考えている。様々な知識や情報を教師が与えていくのは大切であるが、生徒自身が自ら知りたい、学びたいと思つて得たものには残念ながら及ばない。教員が出した一つのヒントに興味を持ち、調べるうちにそこに出てきた他のものを、気が付いたら熱心に調べていた。そんなことでいいと考えている。『夢十夜』は、課題として読まされていたはずが、気が付いたら全部読んでいたとか、漱石の他の作品まで読んでしまったとか、映画化の作品解説や社説などを書いているうちに、評論家という職業の存在を知ったとか、趣味で妄想していたものを表現というかたちでアウトプットすることを知ったとか、生徒には思いがけないところで様々な「出会い」があったようだ。国語は実に様々な世界とのつながりを生み出す。そうして、国語という教科の広さに触れ、おもしろいと感じる瞬間があればいいし、はまり込んでいくことができれば、なおいい。

〔注1〕「高等学校学習指導要領(平成三〇年三月公示) 第2章 各学科に共通する各教科

第1節 国語 第2款 各科目 第4 文学国語 2 内容 (知識及び技能) (1) イ

〔注2〕 同 第4 文学国語 2 内容 B 読むこと (1) オ

〔注3〕 同 第4 文学国語 2 内容 B 読むこと (2) ア

〔注4〕「大学入学共通テスト実施方針策定に当たつての考え方」 6. 記述式問題の

実施方法等 (1) 国語 ② 評価すべき能力・問題類型等